様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月　2 日現在

機関番号：15401
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009 ～2011
課題番号：21720057
研究課題名（和文）　『移民文学』としての『不条理演劇』ーサミュエル・ベケットの越境と劇作の関係
研究課題名（英文）　The Theatre of Absurd as Immigrant Literature: Samuel Beckett's Cross-Bordering and Theatre
研究代表者
川島　健　（Takeshi Kawashima）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60409729

研究成果の概要（和文）：
本研究はアイルランド作家サミュエル・ベケットの作品を中心に、不条理演劇を再評価することを目的とする。20 世紀中葉に現われた一群の劇作家たち総称するために生まれた概念である「不条理演劇」は、これまで哲学的な理論付けがなされてきたが、本研究はこれを移民文学として見直す。その観点からベケット作品の新たな解釈を提供し、従来の演劇史のみならず、モダニズム以降の芸術動向を、社会的、言語的、芸術的アプローチから再考察する。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to explore the works of the Theatre of the Absurd, especially the plays of Samuel Beckett. Used for tagging newly-emergent playwrights in the mid-20th century, the Theatre of the Absurd has been analyzed in terms of philosophical and theoretical notions. This research aims to shed new light on their works by investigating their aspects of Immigrant Literature. By reinterpreting the significance of Beckett's and other playwrights' texts, I analyze theatre movements of the post-Modernism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：演劇学、比較文学、英文学、仏文学

１．研究開始当初の背景

不条理演劇は、『不条理の演劇』（1961）においてマーティン・エスリンがサミュエル・ベケット（1906～1989）、ウジェーヌ・イヨネスコ（1909～1994）、アルチュール・アダモフ（1908-1970）、ジャン・ジュネ（1910～1986）、ハロルド・ピンター（1930～）らの演劇作品を解釈するために、ジャン＝ポール・サルトルやアルベール・カミュなどのフランス実存主義思想を援用しながら作り出した理論的枠組みである（註 1）。これらの劇作家の作品を特徴づけるのは、明確な筋の不在、無意味な会話、登場人物のアイデンティティの欠如である。不条理演劇という概念は、このような劇作を、第二次世界大戦後の、信仰なき時代における空虚な人間像と接続し、サルトルやカミュの思想の延長線上に置くための理論であった。

２．研究の目的

60 年代から 70 年代初頭にかけて盛んに言及された不条理演劇という言葉は、現在ではすでに死語となりつつある。この傾向に対し、本研究は、フランスに活躍の場を求める不条理作家たちがそれぞれアイルランド（ベケット）、ルーマニア（イヨネスコ）、ロシア（アダモフ）など周縁国の出身であり、仏語は彼らにとって「外国語」である事実に注目し、移民文学という視点を導入する。移民文学は通例、自らの移民・異文化体験を自伝的に語る文学形式を指すが、本研究においては、一見抽象的で哲学的に見える不条理演劇のテクストから筆者たち自身の移民体験の痕跡を見出すための理論となる。したがって移民文学という概念は、不条理演劇を、越境を余儀なくされたマイノリティの芸術表現として再評価するために使用される。そしてそれは同時に、移民文学の理論的射程の刷新を図る目的も果たすことにつながる。

本研究が重点をおくのは、ベケットの越境と異文化体験をその劇作から炙りだす作業である。不条理演劇が死語となるにつれて、上記作家の大半が批評されなくなっていったが、ベケットの作品は常に議論の的となってきた。80 年代の構造主義的、ポストモダニズム解釈に続いて、現在のベケット研究で盛んなのはポストコロニアリズム的解釈である。それが焦点を当るのは、故郷アイルランドの植民地的記憶を喚起するイメージが頻出する 30 年代～40 年代の作品であり、不条理と形容された 50 年代の演劇作品はその考察の対象とならない。したがって、近年ベケット研究は、普遍的人間像を抽出する哲学的解釈から、アイルランド・ナショナリズムに関する意識を炙り出す政治的解釈へと移行しているといえる。本研究は、ポストコロニアリズムの移入によって切断されてしまったベケットの 40 年代と 50 年代を連続的に考える目的を有している。そのために導入される移民文学という視座は、ベケットの出身地を強調するポストコロニアリズムに対して、その越境体験に焦点を当て、哲学的解釈にも政治的解釈にも還元しえない、移民作家としてのベケット像を描き出すことを目的とする。そして彼の移民体験を他の不条理作家たちの移民体験と比較しながら、彼の作品の特徴を見定めていく背景にした。

３．研究の方法

本研究は演劇の文学、芸術学的アプローチだけでなく、社会学的、言語的アプローチを必要とするために、出版テクストだけでなく、書簡、日記、ノートなど作家の日常的な息遣いを伺えるテクストを収集する。研究の基盤となるのは綿密なアーカイヴ探索による資料収集、正確なテクスト分析である。2009 年にはアイルランドのダブリン大学図書館で資料調査を行い、ベケットの書簡を閲覧した。また 2010 年にはアメリカはマサチューセッツ州にあるボストン大学図書館で資料調査を行い、ベケットとベルギー人作家ロベール・パンジェや BBC のディレクター、バーバラ・ブレイらとの往復書簡を閲覧した。

また、ベケットの書簡集が 2008 年 11 月から出版されており、現在は第二巻までが入手可能となっている。また膨大なノートや日記

も徐々にではあるが、出版されている。これらの資料を、戦後イギリスやフランスの政治的、社会的風土と照らし合わせながら、「不条理演劇」作品が執筆、制作され、また受容されていった状況を再構成した。

４．研究成果

当初の目的どおり、不条理演劇作品に劇作家たちの移民体験が織り込まれていることがわかった。そしてそれが彼らの言語活動に痕跡を残していることを明らかにした。特に彼らの代表的な戯曲が外国語で書かれていること、そしてそれが作品の不条理な要素と密接な関係を有していることがわかった。特に成果としてあげられるのは、パンジェの仏語戯曲をベケットが英訳した際に、微妙な意訳をして、その作品の政治性を前景化していた点を発見したことである。

またパリを中心に上演されたこれらの作品だが、ロンドンで発行されている新聞や雑誌で様々な論争が起こっていることも判明した。特にイヨネスコとケネス・タイナンの論争を掲載したイギリスの新聞などを精査することで、不条理演劇を巡る論争が、戦後イギリスにおける社会と芸術の関係の雛形を形成したことを明らかにした。

当初はそれほど大きく扱う予定のなかったハロルド・ピンターだが、彼の作品が単たる不条理という枠組みを超えて、戦後イギリス社会の福祉国家体制を写す鏡であることを分析した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1. 川島健、「「カーテン」と「タペストリー」――ハロルド・ピンターと冷戦構造」広島大学総合科学部『人間文化研究』第４号(2012/3), pp.20-34 査読無

2. 川島健、「境界線の女たち――1930 年代ダブリンの公的空間をめぐるベケットの詩――」日本英文学会『英文学研究』和文号第 88 巻（2011/11）pp. 19-32 査読有

3. Takeshi Kawashima, “Censure, Aotocensure et Tabous” *Censure, Autocensure et Tabous* ,Unviersité de Strasbourg（2010/12）, pp. 123-31 査読無

4. 川島健、「廃墟の存在論：サン・ローのサミュエル・ベケット」日本英文学会『英文学研究』和文号第 86 巻（2009/11）, pp. 1-16 査読有

〔学会発表〕（計７件）

1. 川島健、「Samuel Beckett と BBC――サード・プログラムのラジオドラマとイングリッシュネスの再編成」、シンポジウム「戦後イギリス演劇――Nation / Globalisation」日本英文学会中四国支部例会（島根大学 2011/10/30）［司会・発表］

2. 川島健、「BBC サード・プログラムのラジオドラマとイギリスの戦後公共圏の確立」早稲田大学高等研究所第 38 回月例研究会　所友セミナー　（早稲田大学　2011/9/9）［招聘］

3. Takeshi Kawashima, Postcolonial Tradition; or Innovation of Irishness?: Samuel Beckett’s Translation of Robert Pinget’s *La Manivelle,* Samuel Beckett Working Group Open Panel: The International Federation for Theatre Research（大阪大学 2011/8/7）

4. Takeshi Kawashima, “‘Home’ Unbound: Harold Pinter and Geopolitics”, The English Language and Literature Association of Korea（デジョン［韓国］2010/12/2）

5. Takeshi Kawashima, “The Theatre of the Absurd in the 1980s: Art and Politics after

the Collapse of Cold War Structure”, International Comparative Literature Association 19th Congress （中央大学［韓国］ 2010/8/16）

6. Takeshi Kawashima, “Irish Biopolitics in the 1930s: Beckett, Censorship, and Birth Control”, The International Federation for Theatre Research（リスボン大学［ポルトガル］ 2009/7/13）

7. 川島健、「「移民文学」としての不条理演劇――ベケットとイヨネスコにおける第三の言語」日本比較文学会第71回全国大会（大阪大学 2009/6/20）

〔図書〕（計２件）

1. 岡室美奈子、川島健［共編著］、『サミュエル・ベケットを見る八つの方法――批評のボーダレス』（水声社 2012/6）掲載決定

2. 岡室美奈子、川島健、長島確［共編著］、『サミュエル・ベケット！――これからの批評』（水声社 2012/3）総頁数 365、担当頁 107-34, 334-46, 365-67.

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川島 健（Takeshi Kawashima）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60409729

(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：